

太平洋ピースフォーラム 参加者プロフィール

	<p>佐藤健太 (飯舘村)</p> <p>NPO 法人ふくしま新文化創造委員会理事長、負けねど飯舘!! 常任理事 1982 年生まれ。飯舘村で生まれ育つ 2011 年飯舘村で被災、原発事故後、飯舘村や福島の実況を発信し、また自らの足で被災地の現状を伝えるべく案内をし多くのメディアに取り上げられている。福島被災地視察ツアーの先駆けを作る。震災後の初期被曝量の手がかりとなる、個人が行動の記録を残す「健康生活手帳」の作成発行にも関わる。現在も福島市で避難生活を送りながら、発信を続けている。</p>
	<p>タネルオトア・ミシェル・アラキノ モルロア・エ・タウ(タヒチ)</p> <p>仏領ポリネシア地域でフランスによる核実験が行われていた際、労働者として核実験場で働いた。作業場所はモルロア環礁近くのレアオ環礁で生まれ、モルロアとファンガタウファの核実験場。ダイバーとして17年間、礁湖の海底に実験装置の配置や、放射能分析のためのサンプルの準備をした。核実験や原子爆弾の本当の影響を知るようになり、現在は核使用に反対。被爆した核実験場労働者を支援する NGO「モルロア・エ・タウ」に 2001 年から所属、制裁や報復、非難を恐れて、声をあげない全ての元核実験場労働者の代弁者になりたいと思っている。</p>
	<p>デズモンド・デューララム REACH-MI(マーシャル諸島)</p> <p>67 回の核実験が行われたマーシャル諸島に暮らし、核実験の破壊的な影響を見てきた。2010 年に大学を卒業し、大統領府の環境企画政策室で気候変動政策を担当し、その後、地元の高校で教鞭も取ってきた。2つの NGO、Jo-JiKum (環境問題)と REACH-MI(被爆に対する人道的な意識をあげる: マーシャル諸島《仮訳》/ Radiation Exposure Awareness Crusaders for Humanity- Marshall Islands)の創設に関わった。植民地支配による人権侵害について考察することで、人権が守られる世界が実現できることを願っている。</p>
	<p>ブルック・タカラ・アブラハム Elimoñdik (マーシャル諸島)</p> <p>アメリカ生まれ育ち、2006 年にマーシャル諸島共和国へ移住。同国で大学院に進学し、結婚して家庭を持つ。また、核実験の影響に家族を亡くしている。母親は幼い頃にカリフォルニアで行われた放射線の人体実験に知らずに参加したことから、ガンを患い他界。義理の両親も、核実験の影響による健康被害で亡くなった。核実験によりバラバラになったエニウェトク環礁のコミュニティや苦しみと向き合い変化を起こすためのプラットフォームとして、Enjebi 族の首長である夫と NGO Elimoñdik を設立。「Marshall Islands Women's Research Initiative (マーシャル諸島女性研究イニシアチブ)」という新しい社会的起業のディレクターも務め、また博士候補生として持続可能な開発のための教育について研究を行っている。</p>